

## 大学におけるピア・サポート活動の実践と課題

——地域展開に対して大学としてどのような貢献ができるか——

栗原ひとみ<sup>[1]</sup>, 古川 繁子<sup>[2]</sup>, 金子 功一<sup>[1]</sup>

[1] 植草学園大学発達教育学部

[2] 植草学園短期大学名誉教授

ピア・サポートは学生支援の有効な支援方策の1つとして、近年急速に広がっている。この調査報告では、まず、大学において平成28年度より3年間にわたり実践した4つのピア・サポート活動(①ピア・サークル活動, ②ピア・サポート公開講座, ③生涯大学校におけるピア・サポート講習, ④ピア・サポート実践報告会)について成果及び課題を挙げた。次に、4つの活動の実践をふまえ、大学がもっている資源をより有効に活用することによって、ピア・サポート活動の地域展開全体に対して大学としてどのような貢献ができるかを考察した。その結果、3つの視点から整理することができた。3つの視点とは学生による実践活動, 教育/普及活動, 団体間交流の促進である。今後、この3つの視点がそれぞれに相互充実するためには、学内での学生支援にとどまらず、地域の社会資源や人的資源との連携協力が必要である。

**キーワード:** ピア・サポート, 大学, サークル活動

### 1. はじめに

#### 1.1 大学の学生支援

2007年頃より大学が全入時代と言われるようになり選り好みをしなければ、志望者のほとんどが大学に入学できるようになった<sup>1)</sup>。高等教育機関のユニバーサル(普遍)化といわれ、さまざまな学生の入学に伴った、多様なニーズに見合った支援が大学側に求められている。それらのニーズは学修支援にとどまらず、学費支援, 健康支援, 学生生活支援, 就職支援, 等多岐に渡る。多様で多岐に渡る大学の学生支援のあり方はもはや課題領域ごとの体制を組む従来の「学生厚生」という観点だけに留まるものではない。近年の大学教育改革<sup>2)</sup>と相まって、それらは真に学生に資する総合的で包括的な支援体制が模索されている現状である。「学生厚生」の観点を超えた「学生の成長と大学教育」というパラダイムに立ち、学士課程教育全体を通して学生の成長を促していく学内体制と環境を整備することが大学側の喫

緊の課題となりつつある背景をまず押さえない<sup>3)</sup>。

#### 1.2 学生支援とピア・サポート

学生支援の領域は広範かつ多様になり、模索を続ける大学教育の学生支援について、日本学生支援機構による「学生支援の最新の動向と今後の展望」—大学等における学生支援の取組状況に関する調査(平成25年度)より一が、大変示唆に富んでいる。この調査報告書では大学におけるピア・サポート実施状況は43.6%と報告している<sup>4)</sup>。大学における設置形態別の実施状況の内訳は国立80.0%, 公立35.1%, 私立39.3%となっており、国立は8割、私立は約4割である。大学においては国立におけるピア・サポートの実施が広がっている。更にこの調査報告書にはピア・サポートについて以下のような記述があるので引用する。

「今まで支援される側であっただけの学生の可能性と力を、学生のコミュニティ形成に活用したりするピア・サポートなどの試みが注目を集めているの

は、大学における学生の位置づけや「学習」の意味に新たな視点をもたらすものとして注目されよう。これまでの教育活動の中で、暗黙的に行われてきた学生相互の関わりを、教職員の適切な介入のもと、大学が明示的かつ組織的に支援する仕組みとして、ピア・サポートは大学教育の中での新たな位置取りを果たしたといえよう。

「注目度が高く、比較的新しい取組であるピア・サポートの取組については近年急速に拡大してきており、前回調査（平成22年度）に比べ、過去3年間における実施割合の伸び率は緩やかであったものの、プログラム数が大幅に増えているといった状況である。ピア・サポートについては学生が単なる支援の対象ではなく、支援する主体としても位置づけられている。大学と学生との関係性や活動への学生参画など、新たな視点も必要となってくるだけに、今後とも継続的な分析が求められるところである。ただ、活動主体や支援領域が複雑に入り組んでおり、実態把握には限界もある。今後は担当者へのインタビュー調査や、学生調査等を組み合わせながら、より現実に近いデータを蓄積していく必要があり、アプローチの革新の必要性も示唆されている」と示している。

### 1.3 学生支援にとどまらないピア・サポート活動

ピア・サポート活動は学生支援にとどまらず近年は地域への広がりを見せている。筆者らがピア・サポート公開講座を担当した際には、介護施設職員、特別支援学校教員、発達支援センター職員、ボランティア活動をする人等、さまざまな職種の方が受講された。大学が学生支援にとどまらず、地域支援としてピア・サポート活動の展開を支える必要性があるのでないかと考えている。

### 1.4 目的

平成28年度より3年間にわたり植草学園大学において主に4つの活動を実践してきた。4つの活動とは以下である。

まず1つ目は30年度に大きくその活動内容が広がったピア・サークル活動である。2つ目は定期的に関催することになったピア・サポート公開講座についてである。3つ目は生涯大学校でのピア・サポー

ト講習についてである。4つ目はピア・サポート実践報告会についてである。

この4つの活動は従来の学内活動から、ピア・サポート活動を地域へと拡大していった取組である。これらの活動は大学が地域と連携していく端緒になっていると考えられる。その為、それぞれの実践について取組を考察し、成果と課題を明らかにしたい。

また、前述の4つの活動は、ピア・サポート活動の地域展開の実例の一部である。4つの活動の実践をふまえ、大学がもっている資源をより有効に活用することによって、地域展開全体に対して大学としてどのような貢献ができるか（大学の役割）を考察する。

### 1.5 方法

4つの活動であるピア・サークル活動、ピア・サポート公開講座、生涯大学校でのピア・サポート講習、ピア・サポート実践報告会について、以下の点を明らかにする。①実践の概要、②アンケート調査等の結果と考察、③課題。

次に、ピア・サポート活動の学内展開と地域展開の違いを明らかにし、前述の4つの活動において大学だからこそ効果的に推進できた点をふまえて、地域展開に対して大学としてどのような貢献ができるかを考察する。

### 1.6 倫理的配慮

本報告書では個人情報の扱いには十分に配慮し、使用する写真については団体・本人了承の上掲載している。またアンケートは研究目的のみに使用することで承諾を得て実施している。

## 2. 平成30年度ピア・サークル活動

### 2.1 実践の概要

#### (1) 部員数

平成22年度に植草学園大学ピア・サークルは設立された。以来8年間の活動が続けられてきている。

表1 部員数の推移

	1年	2年	3年	4年	合計
26年度	8	8	0	0	16
27年度	1	8	8	0	22
28年度	7	10	8	8	35
29年度	5	4	10	8	27
30年度	28	1	4	8	41

ここでは部員数について記す。表1のように平成30年度はピア・サークル部員が41人となった。従来のサークル活動は初年次オリエンテーションを中心とする履修相談等が主であった。しかし30年度からは2つの新しい取組が加えられた。1つは個人のボランティア活動への情報提供、もう1つは団体のサークルとしてのボランティア活動参加のことである。

これまで学生目線のボランティア活動情報が不十分であったとサークル部長が意見を出し、ピア・サークルとしてボランティア事業を行うことにした。確かに、外部機関や教員から提供されたボランティア情報は参加した学生当事者だけが知り得る限定的なものであり、体験内容の共有やフィードバックは為されていない。ピア・サークルでは限定的であった部分を共有可能に転換した。具体的には、実際にそのボランティア活動をした学生が、体験内容とコメントをSNS（ソーシャルネットワークサービス）に書き込み、サークル部員が閲覧する。例えばボランティア活動日が重なった時にどちらの活動内容が自分にとって有意義であるかを判断する情報源になっていた。大学組織を経由すると時間も手間も要するが、学生がSNSを利用すると利便性・速報性・応答性に富む。この利便性・速報性・応答性を伴った学生へのボランティア情報交流がサークルへの興味・関心を高め部員の増加をもたらしたと考える。

もう1つはサークル単位としてのボランティア活動への参加である。これまでボランティア参加は個人もしくは友人同士・ゼミ単位等であった。初めてのボランティア参加に不安を抱く、主に1年生にはサークル単位での参加が安心して参加できるメリットがあったと考えられる。サークル単位での参加は、体験内容を共有することでサークルへの所属感を強め、部員の増加につながったのではないかと考える。

## (2) 体験内容の充実

サークル単位で参加することで、部員が増えるだけでなく、ボランティア活動の量的拡大に繋がった。学生は体験先で名刺を活用し各種団体代表に渡した。そうすることで各種団体が学生代表と直接連絡を取り合うことができた。それまでは各種団体は大学組織のキャリア支援課に学生のボランティア募集を依頼していた。しかし直接、学生と連絡を取り合うことで、各種団体はイベントごとにボランティア募集をする手間を省くことができた。学生と各種団体とが顔見知りになり、信頼関係を構築することができた。その信頼が次の活動に繋がったと考える。また、サークル単位で参加するので一定のボランティア人数を安定的に供給することができた。そのことが評判を呼び、他の団体からも募集の声がかかるようになった。そして放課後こども教室、自治体の夏祭り、ゴールボール体験会、ポッチャ大会等、様々な活動にサークルとして参加するようになった。

そのうちの1つが「TSUGAノ わこども食堂」である(写真1)。小学生を中心に子どもたちが集まり、学生が勉強を教え、食事づくりの手伝いをしている。定期的にサークルとしてボランティア活動に参加しているため、学生は団体代表者から信頼を得ることができ、メニューの選定等の運営まで任せられるようになった(写真2)。

写真1 子ども食堂



写真2 子ども食堂





表2 30年度 ピア・サークル活動実施計画

学内行事		学外
4月	新生健康診断案内等 フレッシュマンセミナースタッフ 履修に関する相談	ゴールボール大会 放課後子ども教室 手話勉強会
5月	基礎理論研修会	子ども食堂
6月	教育実習相談	車イスラグビー大会
7月	前期試験対策勉強会 教員による研修会	ボッチャ講習会 子どものまちCBT
8月	前期試験対策勉強会No.2	子ども食堂
9月	傾聴訓練の研修会の実施	子ども食堂
10月	資格対策勉強会No.1	学会企画「学生交流」に参加
11月	資格対策勉強会No.2 緑栄祭へのサークル展示 外部講師による研修会	
12月	ゼミ選択による支援	
1月	基礎理論研修会	
2月	学生主催の実践発表会	

表2は30年度ピア・サークルの学内・学外活動実施計画である。このような学内外のサークル活動の循環が始動し始めたのが30年度である。尚、学外活動については、他にも多数あり代表的なものだけを掲載している。

## 2.2 ピア・サークル活動の結果と考察

30年度のピア・サークル活動の実践を通して、学生は学外団体から信頼を得ることができた。学生が信頼を得る重要性が挙げられる。各種団体代表と学生がボランティア内容について会議を行うこともある。各種団体を構成するのは社会人である。社会人と学生が会義で対等にボランティア内容について協議するためには、双方の信頼関係が重要である。各種団体代表者が学生を信頼することができたのは、まずは連絡手段の確実性が挙げられるだろう。学生は携帯電話を主たる連絡手段にしており、連絡を確実に取ることができた。次に3年生を中心にまとめられたサークル内の組織性であろう。役割分担、責任遂行、学生としての行動規範、等が3年リーダーを中心に機能する集団としてまとめられていた。

最後に秩序性・規律性が挙げられる。SNSを活用しながらも個人情報の秘密保持はできていた。ボランティア体験時の学生らしい言動・服装・挨拶礼儀等社会人基礎力の部分は3年生が下級生に伝達し、サークルとしての秩序性・規律性が遵守されていた。

## 2.3 サークル活動の今後の課題

### (1) ボランティア活動の継続性・周期性

体験内容を学修につないでいくような全学的なフィードバック体制は未だ整っていない。体験が一回限り、分散的・補助的な手伝いの体験では、問題意識が醸成されにくい。今後の課題としては、前述の子ども食堂の例のように、ボランティア体験をできるだけ継続的・定期的なものにすることが挙げられる。継続性を担保できれば、参加メンバーが交代しても次回への改善点や今回の引継事項が共有されていく。定期的に開催される見通しが持てれば、次回迄の期間にスキルの向上を目指すことができるのではないかと考える。実際、学生はボッチャ大会審判員に向けて自らボッチャ(パラリンピック競技種目)を体験する講習会に参加している。体験が経験になっていくような継続的・定期的なかかわりが求められよう。平成30年度は体験活動の量的拡大という点で大きな飛躍の年となった。今後は体験内容の中身、質的な充実を図ることが挙げられる。

### (2) 大学の学生支援体制への反映

30年度の新規事業であるボランティアの取組みに関する学生サークル活動は、大学の学生支援体制に示唆を与えている。重要なのは、教員らが縦の関係で指導するのではなく、ピア・サークル部員等の上級生が下級生にナナメの関係で伝えていく支援体制であると考えられる。

筆者らのうちの一人はサークルの履修に関する相談活動直後4月に学生とミーティングし、教員では気づけない学生目線の科目履修に関する詳細な相談内容に驚いた。学生目線ならではの意見を大学組織に反映していくことで学生主体の大学運営が可能になっていくのではないかと考える。

### (3) 一般学生への普及

サークル部員は熱心に活動するが、一般学生に普及していかない傾向があった。30年度こそ部員数は増加したが、この現象の背景にある要因を更に探求していくことが必要である。特に学生は同世代との親密性が他の資源と比べて最も高く、友人からのサポート活用が有効である<sup>5)</sup>。援助要請を友人等身近な人を好む傾向があること<sup>6)</sup>に鑑みて、サークル部員と一般学生の相互関係を促進するピア・サポートプログラムの実施等が有効であると考えられる。

#### (4) 大学の特色を生かす活動の模索

本学は国内ではじめて「発達支援教育学科」を開設している。障害があってもなくても、すべての人のそれぞれの発達を支援するという設立主旨である。この主旨をピア・サポート活動の中に生かして展開していくことが望ましい。障害理解について、インクルーシブ教育論は学部必修科目と位置づけ、全員が履修しなければ卒業できないカリキュラムとしている。こういったカリキュラムの知識学修と合わせて、日常の中で実践することによって得る体験学修が更に深い障害理解へつながるであろう。体験学修の部分ピア・サークル活動に取り入れることで本学設立主旨を実現していけるのではないか。本学の特色を活かした活動を模索することが今後の課題の1つといえよう。

### 3. ピア・サポートの公開講座化

#### 3.1 公開講座化の概要

##### (1) 公開講座開催の経緯

それまではピア・サークル主催の研修会が主であった。社会人受講者の希望が高まり、平成28年度より植草学園ピア・サポート研究会が発足した。これは学生サークルとは異なり、日本ピア・サポート学会千葉県支部会員と植草学園短期大学・大学教員で組織した研究会である。この研究会が平成29年度ピア・サポート公開講座化の実現を促進した。

不定期に年間2回開催されていたピア・サークル主催で行っていた研修会は公開講座化することで定期的に年4回開催されることになり、学園教務課主催となった。年間を通してどなたでも参加できる講座である。公開講座講師は学会認定資格保持者の本学教員であり、高い技術のスキルトレーニングを定期的に受講することができるようになった。

##### (2) 独自資格授与制度

公開講座を2回受講完了した参加者には植草学園ピア・サポート研究会認定の独自資格「植草学園ピア・サポーター」資格を授与した。2回受講すると5時間の研修時間になる。受講内容は日本ピア・サポート学会が認定する「ピア・サポーター」資格に準拠する内容を用意した。ピア・サポート概論、自己理解・他者理解、コミュニケーション訓練Ⅰ、課

題解決技法等である。この制度を利用して平成29年度は19人が「植草学園ピア・サポーター」資格を取得した。この資格を取得したのちに希望すれば、学会認定資格「ピア・サポーター」へ効率的に進めるように学会資格取得に求められる研修内容と整合性を図ることで意欲が高まるようにした。

#### 3.2 公開講座のアンケート調査の結果と考察

公開講座において学生と社会人受講者（以降受講者と表記）が一緒にピア・サポートを学ぶ機会を用意し、その学習効果と意義を検証することを目的としてアンケート調査を行った。

##### (1) 活動日及び調査対象

2017年7月29日（土）学生18人，受講者17人

2017年9月30日（土）学生8人，受講者14人

##### (2) アンケート調査項目

どのような動機づけで参加したか、何を学んだか、今後の課題、の3点について自由記述で回答する質問紙を作成した。ピア研修会終了後記入時間を設けた。所要時間は10分程度。その結果を2名の教員でKJ法を用いてカテゴリーを作成した。

##### (3) 結果

アンケート結果を以下に示す。尚、自由記述内容が複数のカテゴリーに含まれる場合があり、回答者数と回答数は一致しない。

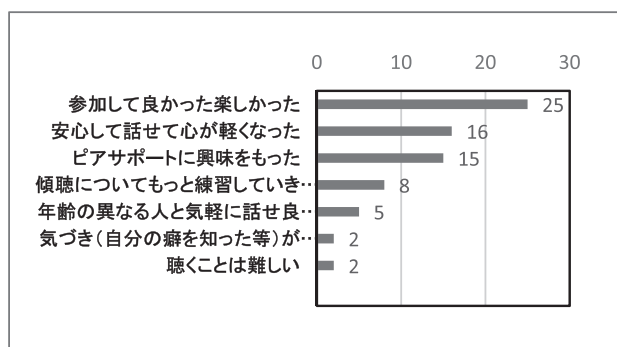


図1 学生の参加効果

図1は学生の参加効果である。学生は「参加して良かった楽しかった」の回答数が多く、次いで「安心して話せて心が軽くなった」「ピア・サポートに興味をもった」であった。

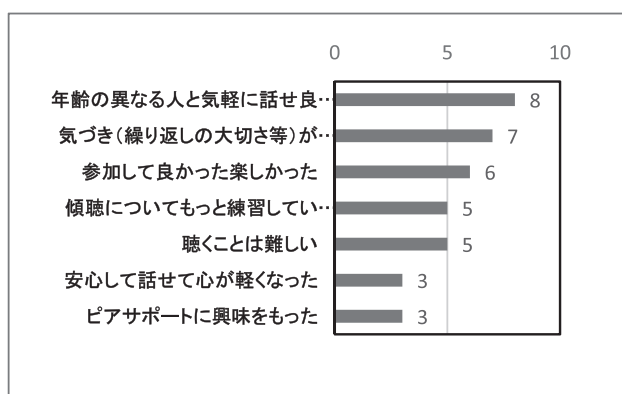


図2 受講者の参加効果

図2は受講者の参加効果である。「年齢の異なる人と気軽に話せて良かった」が一番多かった。

#### (4) 考察

2017年度の学生と受講者の動機づけとして大きくは以下の3点が考えられた。

1点目はピア・サポート自体を継続的に学んでいきたいという動機である。これはピア・サポート活動を日常的な生活(職場を含む)に位置づけて、定期的・継続的にブラッシュアップをする必要性を感じていると考えられる。

2点目は異世代交流として受講者が大学生等若者と一緒に学んでいきたいという動機づけである。「日頃では出会うことのない異世代と笑顔を共有できて嬉しい」、「息子より若い方と話ができて楽しい」等、世代を超えて交流することに大きな魅力を感じていると考えられる。

3点目は資格取得希望である。資格を取得することでピア・サポートについてのブラッシュアップが研修キャリアの証明になる。資格を得て、自覚と責任をもち、積極的に活動していく動機づけになっていると考えられる。

### 3.3 公開講座の課題

これらに鑑みて、今後の課題を整理する。

(1) ピア・サポートを継続的に学んでいきたいという動機について、更に参加者の動機を掘り下げていく必要がある。参加者には職場や生活場面でピア・サポートを実践しているがうまくいかない場面があるからスキルアップをしたいのではないか。たとえ効果的に実践できていたとしても、コミュニケーショ

ンスキルはたえずトレーニングしておきたいと考えるのではないか。例えば、友人との葛藤場面を想定し、ロールプレイで相手の立場に立ってみることで、気づきを実感することなども有効であると考えられる。

(2) 異世代交流については、学生と受講者の双方にメリットがなければ続かないであろう。グループワークを学生と受講者をペアにするなど講座内ではペアワーク等が有効であろう。講座内での交流の充実を図ることで、「参加すると学生のみずみずしい感性に出会える」「参加すると気持ちが安心して軽くなった」等の副次的な効果も得られるように運営することが挙げられる。

(3) 資格取得希望者についてである。資格証を研修回数や内容毎に階層化すること、日本ピア・サポート学会公認資格取得へと導いていくこと等が提案できる。

(4) 公開講座全体の課題である。ピア・サポートを草の根的に裾野広く普及していく活動と、高等教育機関が提供するピア・サポートについての深い造詣とを、参加者のニーズに合わせて発展させていくことが挙げられる。

## 4. 植草学園と千葉県生涯大学校

### 4.1 千葉県生涯大学校ピア・サポート講習の概要

本学は千葉県からの委託を受けて生涯大学校の授業等学習面の運営を担っている。筆者らの1人は生涯大学校の「ピア・サポート講習」の講師として平成28年度より講習を行った。

千葉県は千葉県生涯大学校の存続に当たりマスタープランを策定し<sup>7)</sup>、その中の学習の柱として①地域活動に役立つ知識と技能の習得、②地域活動を実践的に学ぶ体験学習、を目標としている。

今後の方向性として、生涯大学校で学んだ受講生がそれぞれの地域での課題を見出し、住民と共に協力しながら地域活動リーダーとなっていくことが期待されている。その為の具体的な活動を企画・実践できる知識やスキルを獲得・修得することが受講生には求められている。ピア・サポートは地域活動の実践的・効果的なスキルと考えられてカリキュラムに設定された。ピア・サポート基礎講習で実施した内容は表3の通りである。

表3 生涯大学校授業内容

No.	学習内容	時間
1	リレーションワーク 挨拶しよう	10分
2	ピア・サポートの定義・意味・意義	20分
3	ピア・サポート現状と活動事例	10分
4	ピア・サポーターの役割	10分
5	休憩	10分
6	上手な話の聴き方を体験してみよう	60分
		120分

4.2 アンケート調査の結果と考察

2016年度、生涯大学校においてピア・サポート基礎講習時においてアンケート調査を行った。

(1) 調査の概要

調査日及び対象者数

2016年5月24日(火) 東総学園(銚子市)

受講生49人

2016年5月28日(土) 東葛飾学園(流山市)

受講生52人

2016年6月28日(火) 南房学園(館山市)

受講生70人

2016年9月5日(月) 東葛飾学園浅間台(松戸市)

受講生74人

2017年6月26日(月) 東葛飾学園(流山市)

受講生73人

2017年10月18日(水) 京葉学園(千葉市中央区)

受講生74人

(2) 調査方法及び項目

講習終了時に10分間、無記名の質問紙調査を行った。調査項目は以下の通りである。

- ①ピア・サポートを知っていたか。
- ②受講後、ピア・サポートに興味をもったか。
- ③どのようなことに興味をもったのか。

(3) 結果

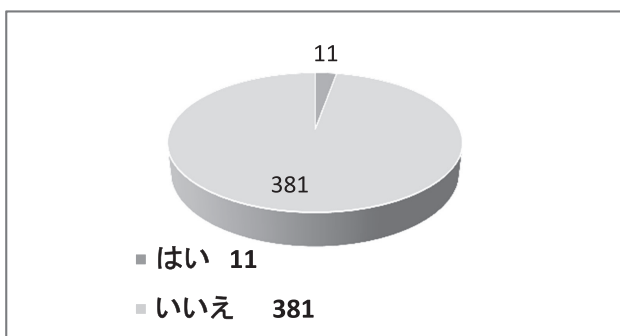


図3 ピア・サポートを知っていたか

ピア・サポートを受講前に知っていた受講生は11人(2.8%)であった。知らなかった受講生は381人(97.2%)という結果であった(図3参照)。

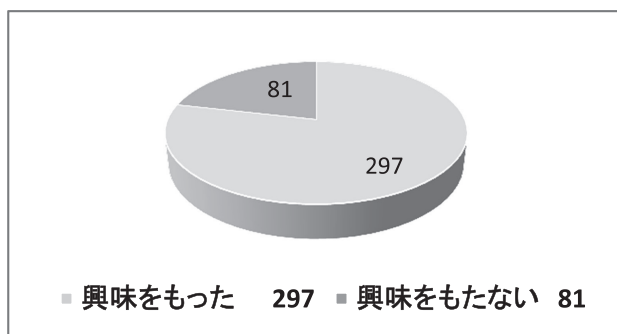


図4 受講後、興味をもった

受講後に興味をもったのは297人(78.5%)であった。興味をもたなかったのは81人(21.5%)であった(図4参照)。

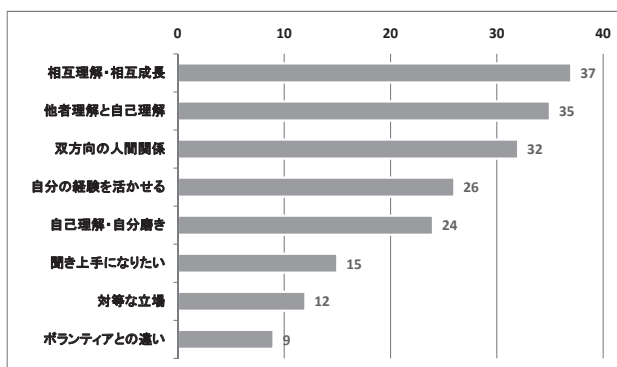


図5 興味をもった内容

受講生が興味をもった内容は多様であった。一番多かったのは相互理解・相互成長(37%)であった。次に、他者理解と自己理解(35%)であった。双方向の人間関係(32%)も多かった(図5参照)。

4.3 生涯大学校におけるピア講習の課題

(1) 生涯大学校におけるピア・サポートの認知度は未だ低い。学校現場のみならず、精神保健の領域等多様な領域で地域において実践は積み重ねられている。講習で地域における実践事例を紹介するとともに、それらの実践を身近に感じ、「自分もやってみよう」という意欲を醸成することが挙げられる。

(2) 受講を機会に興味をもったとしても、その興味を持続・発展させていく部分は個人の活動に委ねられている。更に学びたい受講生には植草学園大学



の研修会に参加してほしい旨、情報を提供しているが、遠隔地で参加が叶わない人もいる。学生を引率して生涯大学校に出向いていくこと、学外公開講座の開催等の課題が挙げられる。

(3) 地域活動専攻は将来地域活動リーダーとして期待されている。また受講生にしても自ら地域活動専攻を選択するということは地域活動に貢献したい等の動機があると推察される。そうであるならば地域活動に資する地域住民とのピア・サポートスキルの習得に特化した学修内容を基礎講習の次段階では提供する等の課題が挙げられる。

## 5. ピア・サポート実践報告会

### 5.1 ピア・サポート実践報告会の概要

地域においてピア・サポートを活用している団体同士が交流する機会が見当たらないことに鑑み、2017年度、各種団体に筆者らが呼び掛けてピア・サポートに関する実践報告会を行った。ここには本校学生のピア・サークル部員も参加した。

#### (1) 実施の概要

- ①日時 2018年2月17日(土) 9:30～12:00
- ②場所 本校講義室
- ③報告者 i 市原市傾聴の会ひだまり
  - ii 千葉いのちの電話
  - iii 品川区クローバーの会
  - iv 千葉県生涯大学校校友会
  - v 本校学生のピア・サークル
- ④参加数；市民22名，学生5名，計27名
- ⑤内 容：それぞれの団体が設立の経緯と活動内容を説明したのち各団体の持つ課題や展望が報告された。
  - i 介護施設での傾聴ボランティアの際に、ピア・サポートで培ったスキルを応用した様子。
  - ii 電話対応における成功体験や失敗体験、研修制度の確立と相談員定着の苦労。
  - iii メンバーの高齢化と新メンバー獲得の工夫。
  - iv 木工細工、バルーンアートの技術取得、研修活動等の報告。
  - v 学内活動（新入生オリエンテーション活動、履修相談、試験対策勉強会等）と、今後は学外活動を志向する趣旨説明。

### 5.2 アンケート調査の結果と考察

報告会終了時に10分間、無記名質問紙調査（自由記述）を行った。その際、個人情報及び倫理的な配慮をし、承諾を得てから行った。

実践のアンケート結果から、学生は「視野が広がった」「自分の活動を改めて振り返ることができた」「将来私も地域でピアをやってみたい」、各種団体からは「有意義であった」「小さな力が大きな力になる」などの感想が寄せられた。学生は視野の広がりや将来の活動への見通しが持てた様子がうかがえ、各種団体からは実践報告会の有意義性と発表内容への共感や興味を述べる者が多かった。学生と各種団体の両者を同時に対象とした講座が双方に好影響を与えたことが明らかになった。さらに、実践報告会の後は、次のような変容に寄与した。

#### (1) 学生と参加団体の連携

「市原傾聴の会ひだまり」代表が傾聴ボランティアをしている介護施設へ学生が参加し、初めて傾聴ボランティアを体験した。「カウンセリング」「コミュニケーション技術」という授業を履修している学生が机上の勉強だけでなく、傾聴の現場やピア・サポートの現場を得ることにより、体験的な知識になったと考える。

#### (2) 参加団体同士の連携

「クローバーの会」と「千葉いのちの電話」の連携が始まった。「千葉いのちの電話」から「クローバーの会」に講師を招き「いのちの電話と傾聴」というテーマで講座が開催された。地域住民13名、クローバーの会会員10名、計23名が参加した。参加者からの感想は「関心があったので参加した。機会と時間ができたら自分も傾聴活動に参加したい」「電話を切った後、気になってしまうと思う」「以前電話相談員をしていたことがあるが、その時のことを思い出した」「電話相談の担当後に振り返りや分かち合いに十分時間をかけていたことを思い出した」などの感想があった。

#### (3) 助成金の獲得

クローバーの会は、平成29年度品川区地域活動推進事業として講座開催と実践報告会の開催へ助成金を獲得した。その助成金を使用し30年度はピア・サポート実践報告会が品川区でも実現した。市原市傾聴の会ひだまりも市原市の助成金を獲得して、



会の報告書を作成した。活動の様子を視覚化して写真による記録報告を行った。活動を可視化することで福祉施設へのPR効果があった。

千葉県生涯大学校校友会は千葉県補助事業「ハイブリッド人材創生事業」の補助金を獲得した。千葉県全土にまたがる卒業生が地域活動リーダー養成に役立てている。

#### (4) 参加団体の活動内容の広がり

千葉県生涯大学校校友会は今までも毎年植草学園学園祭に「木工細工」を行ってきた。実践報告会を機会に更に「バルーンアート」「笑い体操」などの実演・展示も行うようになり活動内容が広がった。実践報告会に参加したことで自信を得たという。地域活動リーダーとして様々な活動をする際に他団体メンバーと顔見知りになるということが力（支援）となっていることが推測される。

### 5.3 実践報告会の課題

1点目は実践報告会の開催の仕方である。多くの場面で教員が主導的に準備をした反省がある。31年度以降は学生主体の実践報告会を開催する。

2点目はピア・サポートの実践的活用についての議論が不十分であった点である。第一回目、参加団体の活動紹介に時間が割かれ、ピア・サポートの技術をどのような場面で実践しているのかの具体的な部分に触れられなかった点である。

## 6. ピア・サポート活動の地域展開に大学として どのような貢献ができるのか（大学の役割）

大学は公の教育機関としての信用、研究成果としての知的財産、マンパワーとしての教職員/学生、そして人が集える場としての教室を有している。ここで報告した学生のピア・サークル活動、公開講座、生涯大学校の講座、ピア・サポート実践報告会は大学が持っているこれらの資源を土台として成り立っている。ピア・サポート活動の地域展開全体に対して大学としてどのような貢献ができるか（大学の役割）を、保有しているこれらの資源とこれまでの実践から考えると①学生による実践活動、②教育・普及、③団体間の交流の促進の3つが挙げられると考える。

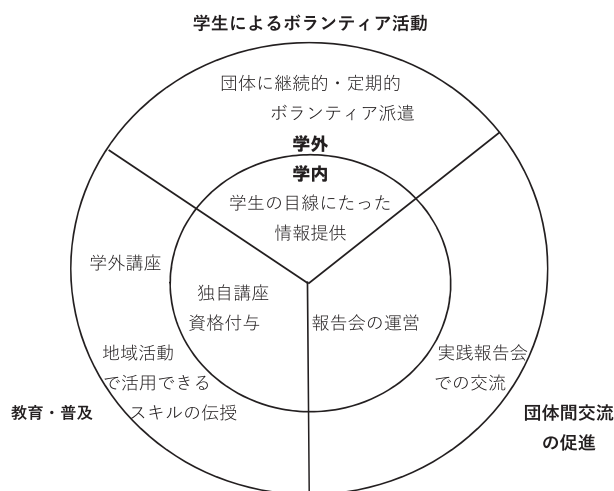


図6 大学が地域展開に貢献できる3つの視点

図6は大学が地域展開に貢献できる大学の役割を3つの視点から整理した図である。内円は学内活動を表す。外円は学外活動を表す。学内と学外が循環し合い、相互充実することが地域連携に繋がっていく。また3つの役割が機能するためには地域の社会資源や人的資源の連携協力が必要である。

#### ①学生による実践活動

ボランティア先の紹介等学生の目線にたった学生サークルによる実践活動が学内にあり、学外で実際にボランティア活動に参加し各種団体と学生が継続的・定期的な関係を構築することを継続・発展していく。

地域で活動している組織や団体に、世代の違いから学生は新しい感覚を発信し、その場に活気をもたらすことがわかった。公開講座での自由な感性で演習に取り組みよく笑っている姿、スキルや思考が未熟でもやってみたいという前向きな発言をする姿などにそれが現れている。地域展開での学生の存在意義は大きい。

#### ②教育・普及

学内で独自資格の授与を行い、学外でその資格を携えた受講者が実践活動をしていく。これからの地域活動リーダーにピア・サポートのスキルを伝えていく、学外講座講師を担っていく等の展開が期待できる。

大学内でピア・サポート活動を展開する場合、担い手は学生と教職員であり、ピア・サポートを活用する場面等はおおよそ予想できる。一方、地域で展開する場合、担い手は地域の組織や団体であり、どのくらいの知識やスキルを持っているかがわかりにくく、ばらつきが大きい。また、活用場面も組織や団体によって異なってくる。

公開講座、生涯大学校の講座の運営で、配慮が必要であったのは、「如何にしてその日の参加者に合わせて講座内容を調整するか」ということであった。ポイントは専門的になり過ぎない、噛み砕いて伝える、繋がり合えるようにすることであった。具体的には、事前に受付名簿から、リピーターの多少、年齢、職業、実務として対人援助職についている人の割合を考慮した。また、開始前から会場に入って雰囲気をつかむ。講座中の発言内容（グループワークを含む）から今日の参加者の傾向を推察する。また、実例を出すときには、参加者にとって身近なものにする。ピア・サポートの基本である「支えることで支えられているという双方向の人間関係の実感や気づき」を目標にすることが有効であった。

### ③団体間交流の促進

学内で実践報告会を運営・実施し、学外で団体間の交流が効果的・波及的に広がっていくように連携する。

大学が持っている中立性や公平性が、団体間の交流を促進するうえで役に立っていた。実践報告会は、植草学園が主催者であり、参加団体への依頼、報告内容の取りまとめ、当日の運営等は教職員と学生が担った。参加団体は、他団体の独自の活動内容に対する関心を深め、また共通の課題（会員募集、会員の定着、会員の高齢化、会員の活動に関する関与のばらつき等）についても意見交換し、実践報告会の来年の実施も要望している。このような成果には大学がもっている特性が活かされていると考える。

### 引用文献

- 1) 2008年 コトバンク  
<https://kotobank.jp/word/%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E5%85%A8%E5%85%A5%E6%99%82%E4%BB%A3-182876> 閲覧日 2018年9月11日
- 2) 最近の大学改革をめぐる動向から検討が求められる視点等〈中央審議会大学分科会第114回配布資料〉  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryu/attach/1336521.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryu/attach/1336521.htm)
- 3) 学生支援の最新動向と今後の展望－大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成25年度）より 独立行政法人 日本学生支援機構
- 4) 小貫有紀子．学生支援の最新動向と今後の展望－大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成25年度）．独立行政法人．日本学生支援機構．「可外活動，学生表彰，ピア・サポート，ボランティア活動」－正課外における学生活動をどのように支援するか．61-81
- 5) 嶋信宏．大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果．社会心理学研究．七．45-53
- 6) 木村真人．わが国の学生相談に対する援助要請研究の動向と課題．東京成徳大学人文学部研究紀要．14巻 35-50
- 7) 千葉県健康福祉部高齢者福祉課平成24年3月 マスタープラン P7

\*本研究の一部は日本ピア・サポート学会第15・16・17回において口頭発表した。

\*本研究は平成29年度植草学園大学共同研究の助成を受けて実施した。ここに記して謝意を表す。

## Abstract

### **The Reality and Challenges of University Peer Support Activities —What kind of contribution can be made as a university to regional expansion—**

Hitomi KURIHARA<sup>[1]</sup>, Shigeko FURUKAWA<sup>[2]</sup>, Koichi KANEKO<sup>[1]</sup>

[1] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

[2] Faculty of Care and Welfare, Uekusa Gakuen Junior College

In recent years, peer support has spread rapidly as an effective student support measure. In this study, four peer support activities (① Peer Club Activities, ② Peer Support Extension Lectures, ③ Peer Support Lectures at Lifelong Learning Colleges, and ④ Peer Support Practice Meeting) were carried out at a university for a total of three years starting in 2016. We gave results and challenges

Next, considering the practice of the four activities, we will examine what kind of contribution can be made to the university as a whole to the regional expansion of peer / support activities by utilizing the resources that the university has more effectively.

As a result, it turned out that it can be arranged from three perspectives. Three perspectives are practical student activities, educational dissemination activities, and promotion of interaction among groups. In order to mutually enhance each of these three perspectives in the future, partner-ships with local social and human resources, as well as campus student support, are necessary.

**Keywords:** University, University student, Circle activity

